

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1)受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2)全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
	<p><b>「確かな学力」の育成</b></p> <p>①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携 ④情報活用能力の育成 ⑤英語教育の充実 ⑥デジタル化の促進</p>	<p>・生徒の興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組めるようにする。 ・教材や指導法などを工夫し、わかりやすい授業づくりに努める。 ・チーム学習・話し合い活動や発表を積極的に授業の中で取り入れ、学びの共同体づくりに努める。 ・ICT機器を活用し、生徒の興味・関心を高め、効果的に学習に取り組めるように教材を工夫し、わかりやすい授業に努める。 ・学習のみならず、日常でも生かすことができるように、情報リテラシーの育成に努める。 ・各教科より進度や理解度に対応した課題を出すことで、家庭学習の習慣化および充実を図る。 ・授業内容の確認や学力向上の成果が見られる課題を作成する。 ・英語教育においては、言語活動を中心とし、4技能・5領域のバランスが取れた授業を展開する。 ・小学校での外国語学習を踏まえ、小中の連携がスムーズにいくような授業作りに努める。</p>	<p>・効果的なサクセスシートを全学年実施する。 ・ICT機器(スクールタクトなど)を効果的に活用し、協働学習を推進する環境づくりに努める。 ・笹トレを活用し、教え合いの基盤を定着させる。また、各教科の授業で効果的に笹トレの手法を取り入れられる。 ・笹トレや定期テスト前の終礼学習、2学期以降の3年生終礼学習を実施する。また、地域と連携した土曜学習の実施により学力保障を図る。 ・ICTの活用を推進し、その状況が保護者に伝わるよう、授業参観やHP等でアピールしていく。 ・振り返り等にICT機器を活用することで、学習記録を基に、個別最適な学びに活かす。 ・各授業の授業規律を保つ中で、情報リテラシーの指導についても徹底する。 ・単元テストの充実を図るとともに、生徒自ら課題を発見して、家庭で取り組めるようドリルパークの活用を推進する。 ・生徒が意欲的に取り組みたいと思える課題にするために、提出後の点検をスムーズに行い、次の学習への意欲が高められるような、励みになるコメントや間違いの訂正、疑問点への回答など個別の指導に努める。 ・放課後学習などを通して、学校での学習時間を確保し、自主学習の習慣化を図る。 ・英語教育については、小学校の授業を見学するなど、小中一貫したカリキュラムでつながるように努める。 ・目的、場面、状況を明確にし、英語を話したり書いたりする必然性を示す。</p>	<p>・生徒、保護者のアンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。 ・教職員のアンケート結果においては「A」「B」評価の割合が100%になる。</p>	B	<p>・生徒アンケート「授業はわかりやすい」の項目では90.7%が肯定的な評価(昨年度比+3.2ポイント)であり、そのうちA評価は39.2%(昨年度比+4.4ポイント)であった。昨年度と比べ向上している。 ・生徒アンケート「授業で話し合いや発表する場面で、積極的に発言できる」の項目は肯定的な評価が70.7%(昨年度比+1.6ポイント)であった。昨年度より向上しているもの、まだ8割には達していないため、今後も引き続きチーム学習や話し合い活動の充実を図っていく必要がある。 ・「電子黒板やプロジェクターなどのデジタル機器を授業に取り入れている」のアンケート結果では、生徒・保護者において90%以上、教職員においては、100%の肯定的評価を得ることができた。 ・アンケートの結果から、生徒や保護者がICT機器を用いて授業が行われている、と実感できるようになっているが、前年度に比べてポイントが少し減少しているため、より効果的なICT機器の使用が必要である。 ・今後も生徒、保護者が学習でICT機器を活用している、と実感できるよう各教科で研修していく必要がある。 ・スマートフォンやタブレット端末の使用に長けている生徒は非常に多いが、校内外においてインターネットトラブルに関わるなど、情報モラルにおいて未熟な面も見られる。そのため、情報リテラシーの育成も必要である。 ・ドリルパークの活用をすすめたことにより、「各教科や学年ごとに出される課題(提出物)は、家で取り組んでいる」の項目について、肯定的な評価が生徒86.1%で、4.5ポイント増加、保護者80.6%で、10.8ポイント増加している。 ・家庭学習の習慣化については、家庭による差が大きいことがうかがえる。 ・英語科においては、担当教員以外にも小学校の授業を参観し、小から中を見通したカリキュラムでつながる小中一貫の充実に努めた。 ・市内の研究テーマと、自校の研究テーマを基にした、授業研究を行った。 ・AIを積極的に活用し、言語活動を中心とした授業を展開した。</p>	<p>・授業のふり返りとして、サクセスシート(ふりかえりシート)は今後も活用していくが、授業内容が確認しやすいような形式を工夫する必要がある。 ・単元テストや小テストを活用し、「わかった」「できた」の達成度を点数で可視化させる。また、内容もスモールステップになるように組み立て、生徒に達成感をもたせるようにする。 ・笹トレについては、今後も問題の改良、取り組み等に工夫を重ね今後も継続する。学年を越えて教え合い、学び合うことで学びを確かなものにするともに、問題が解ける楽しさを味わいながら自尊感情を育てていく。 ・新年度開始の時期に、シラバスの検討と共に、各教科でICT機器の効果的な活用方法について検討する。 ・情報機器の適切な使用法や情報リテラシーについて、日頃の授業のみならず総合的な学習の時間や講演会などを通して指導をしていく。 ・サクセスシート(ふりかえりシート)については、研究テーマとリンクして、効率のよい活用を考えていく必要がある。 ・家庭学習の習慣が身につけていない生徒を中心に、タブレット等を活用しながら保護者とも連携し、生徒の自主学習力の向上を図る。 ・各教科で課題を出す際に提出締切を明らかにするとともに、学級の連絡ボードを活用し、取り組むべき課題の見え方を図る。生徒が課題を提出締切日に学校で慌てて取り組んでいる様子があれば声かけをし、事前に取り組むよう促す。 ・単元テストの目的や意義、評価との結びつきを生徒に明示する。 ・生徒が主体的に家庭学習に取り組めるよう、効果的なICTの活用方法を進める。 ・家庭学習に繋がる取り組みや課題を各学年、各教科の実態に合わせて協議し、工夫していく。</p>	<p>〈学習意欲とICTの活用〉 生徒アンケートで「学校が楽しい」「授業が分かりやすい」との肯定意見が向上した点は、教職員の努力の成果として高く評価する。今後はICTを単なる道具に留めず、興味・関心を高め、将来の展望に繋がるような「主体的で深い学び」への深化を期待したい。</p> <p>〈アウトプットの多様化〉 思春期の特性を考慮し、発言だけでなく、書くことやICTを通じた意見交流など、多様な表現方法を組み合わせたい。</p> <p>〈家庭学習の習慣化〉 小学校からの継続課題である家庭学習について、自学・自習を支える「笹トレ」等の取り組みを評価する。 家庭での学習が困難な生徒への具体的なフォロー体制の構築を望む。</p>

令和7年度 学校評価総括表

【伊丹市立笹原中学校】

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1)受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2)全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	<p>「豊かな心」の育成</p> <p>①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施</p>	<p>・生徒指導提要や本校生徒指導共通理解事項、いじめ対応マニュアル、笹ナビ(ルール表)に基づき、教職員が連携して組織的な対応を行う。</p> <p>・いじめ防止などのための基本方針に基づき、保護者や関係機関との連携のもと、適正な対応を行う。</p> <p>・生徒が自ら正しい判断をし、よりよい学校を創り上げていくための、自治の力を育てる。</p> <p>・成功体験から生徒の自尊心を育む。</p> <p>・不登校生徒に対して、原因や背景について十分な理解を図るとともに、適正な対応を行う。</p> <p>・図書館を活用して朝読書を活性化させ、読書活動を推進することにより、活字に慣れ、読解力を養う。</p> <p>・本とICT機器とのバランスの良い活用方法を模索する。</p>	<p>・学校の教育方針や指導方針、いじめ基本方針などを教職員が熟知し、深く理解した上で、あらゆる機会を活用して、保護者をはじめ関係者に丁寧に説明できるように、組織の一員としての自覚をもって職務に当たる。</p> <p>・学校生活におけるルールを研修会や全校集会を通して、教職員、生徒とともに定期的に確認を行う。</p> <p>・生徒会、PTA、地域と連携して校則を見直したり、新たに作ったりするなどの活動を継続する。</p> <p>・日々の生活の中で、生徒が自主的に考える力を育むための機会を与える。</p> <p>・学年フロアに成果物を掲示するなど、生徒の自己肯定感を育むための取り組みを行う。</p> <p>・生徒指導委員会や不登校対策委員会で不登校生徒に対して個別の理解を深める。</p> <p>・学校行事などで、生徒が主体的に、目標達成に向けたルールづくりを話し合える環境を整える。</p> <p>・学校司書、スクールサポートスタッフ、図書ボランティアと連携し、開館や図書館便り、選書、図書館まつり等のイベントなど、生徒の図書館利用がより活性化する手立てを行う。</p> <p>・委員会活動を活性化し、生徒主導で図書館活動を推進する。</p> <p>・授業で図書館を活用することで、身近に感じさせる。</p>	<p>・生徒、保護者のアンケート結果において、「A」「B」評価の割合が90%以上になる。</p> <p>・不登校生徒数が昨年度より減少することを目指す。</p> <p>・学期毎の問題行動が昨年度より減少することを目指す。</p> <p>・1ヶ月の平均読書冊数1人当たり3冊、平均貸出冊数1人当たり2冊を目標とする。</p> <p>・教員による平均読書冊数の周知を図る。</p>	B	<p>・生徒アンケート「先生はいじめや友達とのトラブルにしっかりと対応してくれる」の項目は93.5%と昨年度と比較すると3.5ポイント上昇している。保護者アンケート「学校は、いじめや子ども同士のトラブルなどにしっかりと対応している」の項目は88.8%となっており、昨年度より3.9ポイント増加している。問題行動の未然防止にさらに尽力し、ゆとりある教育活動を推進していく必要がある。また、組織として迅速かつ丁寧に対応できるように、研修会等で意識の統一を図る必要がある。</p> <p>・職員アンケート「問題行動等に対して組織的に対応できる体制が整っている」の項目は90.9%で昨年度より1.1ポイント減少している。校則等のルールに関する認識にずれが生じている傾向が見られる。継続的に職員会議や研修会を通して、組織として体制の整備、共通理解を図っていく必要がある。</p> <p>・不登校生徒数については、昨年度同期よりわずかに減少傾向になっている。</p> <p>・問題行動数については、昨年度と比較するとほぼ同数となっている。一昨年度前と比較すると40件程度減少しているため、問題行動の抑止はある程度できている。</p> <p>・生徒アンケート「学校は朝の読書や図書館利用など読書に力を入れている」でのA・B評価が83.0%と、昨年よりも10.5ポイント増加している。図書委員が図書館まつりにおいて、創意工夫をこらしたことが実を結んだ。</p> <p>・保護者アンケート「学校は朝読書や図書館の整備、図書館だよりの発行など、読書に親しむ機会を設けている」の項目は93.3%と増加した一方で、教員アンケート「朝読書の徹底や図書館利用促進など、読書活動の推進に努めている」の項目は86.4%と昨年よりも減少している。</p>	<p>・生徒指導に関する研修会や職員会議での共通理解を定期的に行う。</p> <p>・不登校対策委員会や生徒指導委員会の情報共有、並びに生徒指導上の問題点に対する検討を行う。</p> <p>・個別の生徒に関してケース会議を行い、具体的な改善策を検討する。</p> <p>・サポートルームを効果的に活用するなど不登校生徒の長期化を減らす。</p> <p>・図書委員会を中心に図書室の利用状況などについて、全生徒への発信を工夫して行う。</p> <p>・図書館利用の推進を図るため、新刊情報や利用状況の伝達方法を工夫する。</p> <p>・より多くの生徒が図書館に親しめるようなイベントや取り組みを計画し、実施する。</p> <p>・教員が平均読書冊数の周知を行い、生徒の読書状況の実態を掴む。</p> <p>・スクールタクトにて図書館便りを配布しているため、保護者には図書館の取り組みが認知されていると考えられる。今後は、委員会での取り組みを学校全体に周知する。</p>	<p>〈心の教育と読書活動〉</p> <p>不登校生徒の減少に向けた継続的な努力を評価する。多様な価値観を認め合い、人格を尊重し合う関係づくりのためにも、学校図書館での授業実施や放課後利用の促進など、良書や感動体験に触れる機会を積極的に設けてほしい。</p>

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1)受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2)全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	<p><b>「健やかな体」の育成</b></p> <p>①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進</p>	<p>・心の健康の保持増進のため、体力の向上を図る。 ・食育や健康指導を通して、心身ともに、健康な体づくりを行う。</p>	<p>・保体委員会をさらに活性化させ、全校生徒に、健康に関する内容に触れる機会を増やす。 ・部活動が地域移行化するため、「自分の健康は自分で守る」という意識をより高める。 ・病気や怪我の予防、食育など、健康増進に関する情報を掲示板や保健だよりなどで、引き続き広報に努める。 ・生徒への個別指導や保護者連絡をとりながら健康管理を進めるなどの連携をとり、健康増進を目的とした取り組みを推進する。 ・給食について、衛生面の指導、アレルギー対応を行う。 ・体力の向上につながる取り組みをする。</p>	<p>・生徒、保護者のアンケート結果において、「A」「B」評価の割合が90%以上になる。 ・保健だよりを定期的に発行する。 ・給食掲示を季節ごとに更新し、毎日の献立を掲示する。</p>	A	<p>・関係するアンケートの項目では、生徒、保護者に関して、全ての項目でプラスとなった。 ・保護者のアンケート結果において、「家庭では、子どもの生活や学習の様子等をよく把握している」という項目で、昨年度と比較して4.3ポイント上昇した(83.5%→87.8%)。 ・生徒のアンケート結果において、「授業や保健だより、保健室前の掲示板などで健康な体づくりについて学ぶことができる」という項目で5.1ポイント上昇した(92.5%→97.6%)。 ・保健や家庭科の授業を通して、病気の予防や健康な体づくりなどの健康増進について生徒に啓発した。また、掲示板や月1回発行の保健だよりを通して、定期的に健康に関する情報を発信した。 ・安心安全な給食実施に向けて、個人のアレルギー対応プランを作成し、家庭と連携しながら、毎月のアレルギー対応を確認した。衛生面での指導の徹底や、備品を充実させることができた。 ・毎日の献立を掲示することで、給食に対する意識が高まり、残食はほぼゼロでしっかり食べることができた。 ・昼休みに換気を促す放送を行い、全校一斉に換気を行い、健康管理に努めることができた。</p>	<p>・授業を通して、健康に関する知識を習得するとともに、特に、スマホを使う時間や朝食を食べることなど、生活習慣について、学校と家庭が連携して健康管理について取り組みを行う。 ・自身の健康意識を高めることにより、生徒の主体性を育てるため、委員会活動を活性化させる。 ・引き続き、掲示板、保健だよりなどを活用して、病気やけがの予防をはじめとする健康に関する情報を発信する。 ・保健室の掲示物が生徒の目に触れる機会が増えるよう、掲示場所を増やす。 ・触ったり体験できたりできる掲示物を作成し、生徒の健康意識を高める。 ・保健だよりが生徒の目に触れる機会が増えるよう、教室に掲示する場所を作り、毎月の張り替えを保体委員会の取り組みに入れる。 ・保健だよりが発行されたときには、保体委員が内容の紹介を行い、全体への周知を促す。 ・学校給食を活用した食育に、積極的に取り組む。 ・授業や部活動を通して、運動に取り組みせ、体力の向上につなげる。</p>	<p>〈健康管理と食育〉 「残食ゼロ」が継続されている点は、食への意欲と健康意識の表れとして素晴らしい。一方で、個々の事情に配慮した柔軟な対応も大切にされたい。</p> <p>〈部活動の地域移行への懸念〉 地域移行に伴う生徒の運動不足や体力低下を危惧する声がある。家庭と連携し、運動習慣を維持できる体制づくりが必要である。</p>
	<p><b>教育相談・支援体制の充実</b></p> <p>①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実</p>	<p>・生徒の将来を親身に考え、ひとりひとりに合った進路実現に向けた指導を行う。 ・正しい情報提供を図り、家庭との連携に努める。 ・生徒のそれぞれの状況を把握し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携を行う。 ・不登校やいじめなどの未然防止につながるよう教育相談を充実させる。</p>	<p>・進路学習資料を活用し、自分自身を見つめ、適切な進路を設計する力を養う。 ・地域に学ぶトライやる・ウィークの取り組みを活用し、様々な職業があることに気付かせたり、地域社会の一員になる意識付けを行う。 ・教育相談や三者懇談会などの時間などを生かして、保護者との対話時間も確保する。 ・1年生および2年生は毎学期、定期的にキャリア(進路)学習を行い将来への見通しと進路に向けての意識付けを行い、希望を持たせる取り組みをする。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携を深め生徒及び家庭へのサポートを充実させる。</p>	<p>・生徒、保護者のアンケート結果において、「A」「B」評価の割合80%以上になる。 かつ、生徒と保護者の差を10%未満にする。</p>	A	<p>・生徒アンケート「学校は将来の進路について正しい情報提供や指導をしてくれている」の項目は96.7%(前年度92.7%)で、保護者アンケート「学校は将来の進路について正しい情報提供や指導を行っている」の項目では90.1%(前年度82.3%)と、生徒との意識の開きが前年度と比較し、差が改善された。 ・今年度は1年生と2年生の保護者に対する進路説明会を1回ずつ実施したため、保護者の肯定的な回答の割合が高くなったと考えられる。また、まなびポケットを活用し、生徒への配信内容と同じ情報を保護者にも配信していたことも、肯定的な回答の割合が高くなった要因である、と考えられる。 ・三者懇談会や教育相談などの機会を生かして、個に応じた進路についての対話時間を確保することができた。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携については、生徒指導主事を中心に進めており、不登校対策委員会や校内でのケース会議などに参加してもらい、情報交換を行った。</p>	<p>・進路説明会の実施を、今後も継続していくとともに、スクールタクトやまなびポケットでの配信などを活用して、積極的に情報発信するよう努める。 ・進路情報は毎年変化している。本年度は公立高校がWeb出願になり、手書き願書での出願は少数派となった。操作方法や受験料振込のタイミングなど保護者との意思疎通をしっかりと図り、連絡を密にする必要がある。 ・学校における進路の取り組み内容や関連する活動を計画的に推進するとともに、保護者にも進路通信などを活用し、引き続き、積極的に情報を発信する意識を持って伝えていく。 ・1年生に対しても仕事体験をするなど、将来のことを考える場を設定する。 ・欠席や遅刻が増えたり、表情がいつもと違うなど、生徒の変化を見逃さず教員間で情報交換を密にするとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに相談し、専門的なアドバイスを受けるなど、積極的な関わりを続けていく。</p>	<p>〈進路指導の深化〉 本人の希望や適性を尊重しつつ、将来の生き方を見据えた深い対話の時間を確保してほしい。保護者の意向だけでなく、生徒本人が主体的に判断できる力を養うことが重要である。</p>

令和7年度 学校評価総括表 【伊丹市立笹原中学校】

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1)受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2)全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
	特別支援教育の推進 ①特別支援教育の充実	・特別支援学級生及び必要に応じて通常学級の生徒に対しても個別の指導計画を作成し、適切なサポート体制を強化する。 ・特別支援教育に関わる教職員だけでなく全体で、日常的に連携をはかりながら、特別支援教育推進委員会や学年会議などで生徒の情報を共有し、適切な支援につなげる。	・個別の指導計画の作成が生徒支援の充実につながるよう、適切な時期に適切な方法で作成し、学年の共通理解を図る。そのために、特別支援教育推進委員会から全教職員に周知し、サポートファイルの内容を検討する。 ・配慮が必要な生徒、個別の支援が必要な生徒を年度当初に確認し、特別支援教育推進委員会で共通理解を行う。毎週木曜日に行う特別支援教育推進委員会で情報共有を行い、各学年にフィードバックする。	・教員のアンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上を継続する。	B	・アンケートでは、18「組織的な対応」19「一人一人の教育的ニーズに応じた対応」の項目でどちらも教職員の肯定的意見がどちらも95%以上(前年度88%)と前年度より上がっている。特別支援教育への意識が高くなり、かなり定着してきた。 ・特別支援教育推進委員会で、個別の支援が必要な生徒の共通理解を図ったことにより、学年間での情報共有がスムーズに行われるようになった。特に、進路の情報が共有され、具体的な支援の方向性をフィードバックすることができた。 ・支援が必要な生徒に対して、学年・学校全体でしっかりと支えようとする意識があり、協力し合うことができた。 ・通級指導が定着し、個に応じた指導を充実させることができた昨年度に続き、教師1人で2人の生徒を授業する「2対1」の授業も実践できた。 ・個別の指導計画作成や、生徒一人一人に沿った具体的な支援内容については学年、学校としてさらに改善の余地がある。	・特別支援学級担任、生徒支援担当、通級担当、特別支援教育支援員、保健室、関係機関など、様々な立場の教職員が情報を共有し、連携することで、一人一人の生徒を把握し、支援を行うことができるようになってきている。今後も対話を重ねながら、生徒が必要な支援を受けられる手立てを講じる努力をする。 ・支援の具体的な方法について、研修の機会を設け、共有し、より効果的な支援に努める。	〈きめ細やかな生徒支援〉 特別支援教育において、特定の担当者だけでなく、多くの教職員がチームとして一人ひとりの個性を理解し支える体制を継続してほしい。

令和7年度 学校評価総括表

【伊丹市立笹原中学校】

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1) 受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2) 全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
	教職員の資質向上 ① 研修等の充実	・生徒や保護者の評価や学力調査の結果を検証し、授業等の改善や工夫につなげる。 ・学力向上のための手立てを共有し、効果を検証する。	・単元の中にプロジェクト型学習を取り入れた、授業づくりを行い、最終的に自ら探究する力を生徒につけさせる。 ・授業スタンダード「笹スタ5」を基に、普段の授業の充実を図る。 ・授業改善プロジェクトを導入し、授業力向上に努める。	・生徒、保護者のアンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。	B	・生徒アンケート「授業はわかりやすく楽しい」の項目でAB評価が90.7%であり、昨年度より3.2ポイント上昇した。 ・保護者へのアンケートの中で「先生は生徒の学力向上のため、授業の工夫や補習の実施などに努めている」の項目は過去3年間で年々低下していたが、今年度は回復傾向にある。引き続き90%にむけて取り組んでいきたい。(84.9% → 83.5% → 84.5%) ・プロジェクト型学習と授業スタンダード「笹スタ5」をもとに、普段の授業力向上を進めている成果が表れつつある。	・保護者へのアンケートの中で「先生は生徒の学力向上のため、授業の工夫や補習の実施などに努めている」の項目でAB評価が84.5%であり、昨年よりも1.0ポイント向上している。保護者や地域の方々に、授業参観の機会を増やしたり、来年度から実施予定の授業改善プロジェクトに取り組むことで、さらなる授業改善を目指していく。	〈専門性の磨き込み〉 授業のわかりやすさだけでなく、表情や声の出し方を含めたプロとしての研鑽を期待する。  〈向上心の評価〉 教員自身の厳しい自己評価を「さらなる成長への意欲」と捉え、次年度の「待つ指導」の実践を支持する。
教育環境の	学校を支える組織体制の整備 ① コミュニティ・スクールの充実 ② 地域と学校の連携・協働体制の構築	・コミュニティスクールとしての取組を充実させるため、学校運営協議会ならびにPTA本部との定例会を開催し、保護者や地域と相互理解を深める。 ・学校行事やオープンスクール等の実施により、学校教育活動について保護者や地域との連携を図る。	・生徒会を中心として、地域ボランティア活動の活性化を図る。 ・学校だよりや学年だよりなどの配付物のデジタル配信、正門横や校内の掲示板への掲示、地域の会議等への参加、ホームページの随時更新等により、学校教育目標や教育方針、行事、授業等の様子を発信し保護者や地域の人々に広くPRする。 ・学校行事やオープンスクールなどを保護者や地域に広く案内し、公開するなど、学校への来校や学校教育活動への参加の機会を設定する。	・年4回の学校運営協議会ならびに月1回のPTA本部との定例会を開催し、情報交換を行う。 ・生徒アンケートの項目「地域活動に参加したい」の「A」「B」評価の割合が、75%以上になる。 ・学校だより、学年だより、その他配付物についてデジタル配信を行うとともにホームページを更新する。 ・学期に1回オープンスクールなどを実施し、保護者等が来校する機会を確保する。	B	・年4回の学校運営協議会および月1回のPTAとの定例会を開催し、学校教育活動の様子について情報提供し、各行事の開催方法や、今後の部活動地域移行等について協議することができた。 ・保護者や地域住民による学校支援ボランティア(図書、園芸、土曜学習)の活動を定着させることができた。 ・生徒アンケート「地域行事に参加したい」の項目で、肯定的な評価が昨年度の79.3%となり、目標達成できた。 ・「さきはら祭り」「笹小地区もちつき」の準備・後片付けの協力や祭りへの参加を生徒に広く周知した。また、こども園や小学校、地域と連携し、「笹フェス」の会場として本校でイベントを開催した。 ・学校だより、学年だより、その他の連絡は、まなびポケットを活用し、デジタル配信を行ったが、学校HPの更新が不定期になってしまった。 ・生徒アンケート「学校だよりや学年だよりなどで学校のことがよくわかる」の項目では96.0%と、昨年度より4.9ポイント上昇した。しかし、保護者アンケート「学校は、学校の教育方針や行事、活動などを学校だよりや学年だより、ホームページなどを通じて保護者に伝えていく」の項目では96.2%から90.6%と下がってしまった。 ・体育大会、文化祭の開催および学期に1回オープンスクールを実施した。保護者アンケートでは「教育活動を公開している」は、95.0%となり昨年度より5.1ポイント上昇した。	・学校運営協議会委員やCSコーディネーターと連携し、ホームページ等を活用して、地域や保護者へ学校教育活動の情報を積極的に発信する。 ・生徒会を中心に参加型地域学習などを企画する(笹フェスの継続等)。 ・地域へのボランティア活動を引き続き推進する。 ・個人情報に留意しつつ、各種行事や講演会、部活動など学校の様子が具体的にわかるよう、ホームページを更新し、啓発に努める。 ・体育大会、文化祭の実施方法を見直し、生徒や教職員が取り組みやすい形に改善していく。 ・オープンスクールについては、授業だけでなく、道徳や人権学習、かるた大会などの行事も参観できる形を定着させていきたい。	〈学校運営協議会のあり方〉 組織が形式的にならず、学校を支える実質的な機能としてどうあるべきか、委員自身も自省しつつ、学校と共により良い連携を目指していく必要がある。  〈地域における役割〉 中学生が地域で活躍し、感謝される体験(清掃活動やボランティア等)を通じて、自己肯定感と社会貢献意識を高めてほしい。

令和7年度 学校評価総括表 【伊丹市立笹原中学校】

教育目標		予測不能な未来を自立して主体的に生き抜く知・徳・体バランスのとれた「人間力」のある生徒の育成						
重点目標		(1)受容と共感にもとづいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、主体性、創造性、豊かな人間性、確かな学力を育む (2)全教育課程を通して、高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、共に支え合う仲間づくりを行う						
施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
整備・充実	<p>安全・安心な教育環境の充実</p> <p>①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自転車交通安全教室や防災訓練を通して安全に生活することや自分の命を自分で守ろうとする意識を高める取り組みを行う。</li> <li>・災害や犯罪から身を守るすべについて、具体的に学習する場を設ける。</li> <li>・清掃活動を活性化し、教育環境を整える。</li> <li>・安全点検を徹底し、安全・安心な学校づくりを進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災や安全に関する情報を随時活用し、実生活とのつながりを意識させるような学習を企画する。今年度は、2年生の総合の授業で「防災」をテーマに掲げ、本校在籍のEARTH隊員による防災授業や、校外学習で「人と防災未来センター」を行程に組み込むなど、防災学習に重点的に取り組む。</li> <li>・防災に関する教師向けの研修会を実施し、学校防災体制の見直しや推進を進める。今年度は、全教員で「笹中防災マップ」の作成に取り組む。</li> <li>・社会科や家庭科の授業を通じて、防災に関わる知識を身につける。</li> <li>・美化委員会を中心として清掃用具の整備と洗剤等消耗品の補充を行う(毎週水曜日)。</li> <li>・安全点検を徹底するため、職員朝礼の連絡事項や、紙面で安全点検実施日を教職員に周知する。</li> <li>・もくもく清掃に取り組み、学校環境をきれいな状態に保つ。</li> <li>・生徒の通学、下校について、全校集会等で交通ルールやマナーの徹底を呼びかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒、保護者、教員のアンケート結果において、「A」「B」評価の割合を80%以上にする。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害や不審者から身を守る方法、交通ルールなど安全に関する質問について、昨年度の生徒アンケートの結果と比べ、肯定的評価が+4.5ポイントと大きく改善した。(R6 90.3%→R7 94.8%)</li> <li>・保護者アンケートでは、交通ルールなどの安全の項目が+4.2ポイントと大きく改善した。(R6 88.0%→R7 92.2%)</li> <li>・教員アンケートでは、災害や不審者から身を守る方法についての項目について、前年度と比べ、最も肯定的な回答をした教員の割合が大幅に伸びた。(R6 28.0%→R7 54.5%)</li> <li>・災害を具体的に想定した訓練を目指して、訓練の内容を前年度からさらに見直すことができた。地震想定訓練では、訓練実施時間を教師にも告知しないことに加え、「授業者以外の教員が教室の様子や避難経路の安全を確認する行程を加えるとともに、確認した情報を職員室に持ち帰って共有し、それをもとに管理職が避難指示の案内放送をする」という行程を加えた。</li> <li>・学校美化に関する評価は非常に高く、アンケート結果も生徒・保護者ともに、97%以上が肯定的評価であった。</li> <li>・安全点検の実施について、職朝連絡に加えて紙面での呼びかけをしたことで、昨年度よりも教員アンケートの結果が改善された。(R6 88.0%→R7 90.9%)</li> <li>・今年度は、美化委員会による落ち葉掃除がインフルエンザの流行と学級閉鎖にともない、実施できなかった。</li> <li>・もくもく清掃が新入生にも少しずつ定着しているが、学校全体に浸透しているとはいえない。</li> <li>・地域や関係機関と連携した防災体制・防犯体制の項目の肯定的回答が、教員アンケートにおいて、大きく下落した。(R6 84.0%→R7 77.3%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月の地震想定防災訓練では、毎年度工夫や改善を加え、内容の見直しを進めてきた。今後もより実効性の高い訓練のあり方を模索していきたい。</li> <li>・地域と連携した防災体制・防犯体制の構築が急務である。今年度、自己評価がBからCに下落したのは、教員アンケートの地域との連携の項目が80%を下回ったためである。地域の防災拠点としての学校づくりを進めるために、まずは担当者同士のコミュニケーションから始める必要があると思われる。</li> <li>・「笹中防災マップ」を研修会や職員会議を通じて職員全体に周知させる。</li> <li>・2・3年生を対象に自転車の安全な乗り方やルール、罰則に関する知識を身につけさせる。スクールタクトを通じて、定期的に通学における安全について周知する。</li> <li>・専門委員会の中で、清掃用具の不足や不備があれば補充したり修繕したりするようにする。</li> <li>・もくもく清掃時に余計な会話をしてしまう生徒がいるため、美化委員に注意をさせる。また、指導時になぜもくもく清掃を行っているのかを伝える。</li> <li>・秋の落ち葉清掃を再開させる。美化委員だけでなく、ボランティアや部活動など、有志の生徒と連携して活性化に努める。</li> <li>・災害対応訓練だけでなく、不審者に対応した訓練の実施について検討を進める。</li> </ul>	<p>〈危機管理の徹底〉</p> <p>近年の情勢を踏まえ、不審者侵入対策や災害訓練など、いざという時に「自分で考え行動できる」ための思考力・行動力を養う訓練を重視してほしい。</p>

学校関係者評価総括

●安定した学校運営…組織刷新後も落ち着きがあり、明るく開かれた学校運営が行われている。●生徒の肯定的変容…「学校が楽しい」「授業がわかりやすい」とする生徒が大幅に増加し、教職員の指導とICT活用の成果が明確に表れている。●教職員の向上心…教員自身の自己評価が厳しい点は、現状に満足せずさらなる高みを、めざす姿勢の表れとして高く評価する。●健やかな生活習慣…挨拶運動の定着や、給食の「残食ゼロ」が継続されていることは、心身の良好な成長を示している。

次年度に向けた重点的な改善点

●「自立」を促す学びの深化…ICT活用に加え、自分で考え、「書く力」を養う対話的な学びを一層推進すること。●心の居場所と読書の推進…不登校生徒等への組織的支援を強化し、図書館活用等を通じて、多様な価値観に触れる機会を増やすこと。●家庭教育との連携…学習習慣の定着や体力維持には家庭の協力が不可欠であり、保護者の意識改革を促す情報発信を工夫すること。●地域での役割創出…ボランティアや地域行事を通じ、中学生が社会の一員として「誰かの役に立つ」実感を伴う体験を積める環境を整えること。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った